

佛
譜
一
系
集

後
編

911.308

八

後前 2

俳諧一葉集 消息之部



古学庵佛号

幻窓 湖中

快富 久藏 校



一、此法を王和抄に切る長しき物を点ら各段に書かす
 終り感んたすこと等しくかくお詞を是のそは是の端にと
 一、此の法は上巻の如く凡そこの能はるるや
 隨ふて教へてはては可なり秋のけりては一枚のたも
 下に空しく松篁なるもたししるるを能く此更老僧身投筆
 才のたしむゆゆのよき古きゆゆのたしむるを其考のゆ
 ありては作ると作らるるや久たるとは新しししくしてゆてゆ

ついでに、おのれは、
 自修の心、たゞ、
 一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、百、

三月十号

東文館

東文館

桐葉子

何處に、
 一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、百、

三月十号

東文館

三月廿二

桐葉子

東文館

御中 十端をえり并定の成りなり 小吉

○ 道念(抄)

是より道念の二季ゆきては四子に遊ばせりて母を養ふありて
んはしきくし天にたれをえり月長く地は是をえりてせり
高と道念はひりてめをて遊ばしものし世にひりて遊ば
ものをもて学ばふはの飽くをりてれり此はも度と遊んたりれり
りてめめはひりてめをて遊ばしものし世にひりて遊ば
おりの代は遊ばしものし世にひりて遊ばしものし世にひりて遊ば
ふは鼻のうけたりてめをて遊ばしものし世にひりて遊ば
昔よりとハゆりて遊ばしものし世にひりて遊ばしものし世にひりて
一と遊ばしものし世にひりて遊ばしものし世にひりて遊ばしものし世に

官より遊ばしものし世にひりて遊ばしものし世にひりて遊ばしものし世に
ゆりて遊ばしものし世にひりて遊ばしものし世にひりて遊ばしものし世に
虚之天に遊ばしものし世にひりて遊ばしものし世にひりて遊ばしものし世に
いりて遊ばしものし世にひりて遊ばしものし世にひりて遊ばしものし世に
はひりて遊ばしものし世にひりて遊ばしものし世にひりて遊ばしものし世に
合の人にもゆりて遊ばしものし世にひりて遊ばしものし世にひりて遊ばしものし世に
折の折に遊ばしものし世にひりて遊ばしものし世にひりて遊ばしものし世に
定てくはの遊ばしものし世にひりて遊ばしものし世にひりて遊ばしものし世に
一遊ばしものし世にひりて遊ばしものし世にひりて遊ばしものし世にひりて遊ばしものし世に
ものし世にひりて遊ばしものし世にひりて遊ばしものし世にひりて遊ばしものし世に
牛のりて遊ばしものし世にひりて遊ばしものし世にひりて遊ばしものし世に

三月廿日

とら

竹然丈

○
の星や根ささめぬ山うらとをしよ山沖の雲を余りけり
けりされておまへる人の位を越えぬ叙ゆきよふつうと
の跡をけりまよひのうらとをくまらぬと

くまらぬ

女角換

○
いよ縁厚お天形家の切す後後をいふゆりらるるに
おはれりまよひのうらとをくまらぬ叙ゆきよふつうと
の跡をけりまよひのうらとをくまらぬと

秋のいりぬらぬよきも余りらるるに
まらぬらるるやをいふに
つ用程多く可なり信らわあしくハハ丸お、白紙子おもて
去るきりけり

白紙

くまらぬ

白紙社見

○

一石清の酒本坊法京の海へつる丘家おまて巨一山新始りてハ
年暮りてつるをいへはあつちりたハ
りか一の加へりけりもの
さとしけりらるる程おあつちりたハ
家七二のをまんらり程おあつちりたハ

舟をたぐりてよくかみこむ所あり
これより轉一とていふはむしうの居り人の口をくむ

とて紙



一より若中好御ありて金子二分のりて紙押付
るは区属するはされとあるものにて

とて紙

木園様



当座何人附る向うは白紙中何人等し予、私行

有るも予もは少味最御依りて内定しあしをいせ
定の多趣ひもくまきもあはれ東武のいふめし更

を附る

其のたのむるきもあしをいせ

とて紙

書のある花は贈りてよみ

二月上候

とて紙

木園様

千七百

善修の足成人の付るを文とて信を更し候
候、予有る、最りて候とあし及込をい隨下

此酒の味は白く似てきせぬ古酒今未未本一白の瓶いついこの時
う秋風来く芭蕉の書もあらく隠れん中をひひ一白一生これ
のうたに存るううう中へさうら鼻立ちくおこあふ肩のあつら
羽とてふすさやにわかぬい

○ 飲酒一枚起請

もろこしわの船をまゐるしの上を此まゐるしやうて海より
しとゆふに又からんをうひ幕をのびて飲了海をたゆふに
此酒を越すの宿る南無阿弥陀仏とて一白の瓶いついこの時
すくく世にひくく一杯のあつらあふおれ子酒にひひ但三枚
四杯の肴外へする此酒高く決定しと改りき酒者
飲るるくさうらう酒のひまうひわかむく海を大嘗に二枚此

酒の味は白く似てきせぬ古酒今未未本一白の瓶いついこの時
う秋風来く芭蕉の書もあらく隠れん中をひひ一白一生これ
のうたに存るううう中へさうら鼻立ちくおこあふ肩のあつら
羽とてふすさやにわかぬい

酒の味は白く似てきせぬ古酒今未未本一白の瓶いついこの時
う秋風来く芭蕉の書もあらく隠れん中をひひ一白一生これ
のうたに存るううう中へさうら鼻立ちくおこあふ肩のあつら
羽とてふすさやにわかぬい

酒の味は白く似てきせぬ古酒今未未本一白の瓶いついこの時
う秋風来く芭蕉の書もあらく隠れん中をひひ一白一生これ
のうたに存るううう中へさうら鼻立ちくおこあふ肩のあつら
羽とてふすさやにわかぬい

十七日

廿二日

七十七日

○
ある事もぬえの事事とて改をわたりて侍る一物ゆふ
流しと改希やら

一息をえりしの句

かゝ婿は杉を花より 縁よりきりて是れ

山は木々をわたりて 四のうすまこれ子

千かたのうすまのうすまをうすま

一昨秋は萩のゆきそひ有は是れ世をわたりて是のうすま

よりのあまのうすまのうすまのうすまのうすまのうすま

うすまのうすまのうすま

一昔角のうすまのうすまのうすまのうすまのうすま

かやうのうすまのうすまのうすまのうすまのうすま

和歌

一浪音とら成は後望ふはたし ひと能とえり

五月十二日

芭蕉枕書

子歌を傳

○

○
しお上はしるきつ編末なり 今存大巻一巻とてうりては
ア侍屋へ趣きあつて いらぬ物へは拙名抄を病くとの
志のへへてうりてうりて 本日おのりては 侍屋へしるきつ
は方季このころ前中巻の抄をいへておれりてうりては
是れしるきつの方抄をいへてうりては 是れしるきつ
不傳ありては 是れしるきつをいへてうりては 是れしるきつ

ハミヤケ台のぬ流りゆり所 向家草うらまの物ハミヤケ台 浦島
草の宿所抄者故く浦島草をましくしつやしる所ハミヤケ台の物
草の宿所抄者故く浦島草をましくしつやしる所ハミヤケ台の物

正内三三

芒道

正内三三 正内三三 正内三三 正内三三 正内三三



正内三三 正内三三 正内三三 正内三三 正内三三
正内三三 正内三三 正内三三 正内三三 正内三三
正内三三 正内三三 正内三三 正内三三 正内三三
正内三三 正内三三 正内三三 正内三三 正内三三
正内三三 正内三三 正内三三 正内三三 正内三三

正内三三 正内三三 正内三三 正内三三 正内三三

正内三三 正内三三 正内三三 正内三三 正内三三
正内三三 正内三三 正内三三 正内三三 正内三三
正内三三 正内三三 正内三三 正内三三 正内三三
正内三三 正内三三 正内三三 正内三三 正内三三

正内三三 正内三三 正内三三 正内三三 正内三三
正内三三 正内三三 正内三三 正内三三 正内三三
正内三三 正内三三 正内三三 正内三三 正内三三
正内三三 正内三三 正内三三 正内三三 正内三三
正内三三 正内三三 正内三三 正内三三 正内三三

際手は是れ無きものも飽きか手ののみならず
心もさねる料理をもとく飽きを飽きしに
そのもたけ点悉く肥あつて見すは是の建立の一
筋ありふたの又志をも勉め情をも慰めありしは作の是非
をもとくはこれ誠のそま入ぬくも是れありし
定家の骨を拗つ西行のすちをたてし樂天の情を
以杜子の方す入くは族於鄙を加えて十の指をもふ
すす君と別け十の指をもたてし情の情の情の
一法通るや大坂をいそげいそげののり指をいそげ
其志之季にあつて尺、申るるも、おぼせの人の
西行能因の志似あつてくくおぼせの人の
うらみののりもあつて何れ不審うらむも
おぼせの人の

不道はすくははるありてありしは風移のふかけ
あつておぼせののりもあつてありしは

二月十八日

とて代

水様



酒をたき物なりは度と編とまきしはいそげのりもあつて不
まに沙傳のかきりもあつて

一正義の子根のり勢入りは中物あつていそげのりもあつて不
不仕の意、此ものこへりもあつていそげのりもあつて不
ふりはは方いそげのりもあつていそげのりもあつて不
のりもあつていそげのりもあつて

この新儀の御しを中へはさねて焚くうのつちを此の
つとむるに大丈夫感心す本文字にッ此をふりてうの
ふりて命をさるる古人のうのつちをのつちをさるる
さのみをさるるにッ此をさるるにッ此をさるるにッ
すや連弁にッ此をさるるにッ此をさるるにッ此を
みん

四月廿四日

七支

北枝丈

四支丈 焚くうのつちをさるるにッ此をさるるにッ 北枝



は君令より白末五斗散り一馬
一不儀ふりてさるるにッ此をさるるにッ 北枝

かゝるくみりて只四支をさるるにッ此をさるるにッ
さるるにッ此をさるるにッ此をさるるにッ此を
えりや 豊の上より米にさるる 北枝
さるるにッ此をさるるにッ此をさるるにッ此を
さるるにッ此をさるるにッ此をさるるにッ此を
さるるにッ此をさるるにッ此をさるるにッ此を
さるるにッ此をさるるにッ此をさるるにッ此を
さるるにッ此をさるるにッ此をさるるにッ此を
さるるにッ此をさるるにッ此をさるるにッ此を

四月廿四日

七支

北枝梅

誰人の蒸えさるるにッ此をさるるにッ此を
何人さるるにッ此をさるるにッ此をさるるにッ

茶をえく誰人いさうとも



然るに約本より新雨晴名取をわいひきよめ人のみ訓
女ふんじ集り茶を花若の根ナをくくはゆ先木木
より一向をこくくぬ人之言吹てゆをてすくはひ中
麻留も木石より世ひ中は対き雨もすくはゆき物
も新雨他人の心くくくはひに信あう見もくやあら
りて成りりて新雨も新雨入下はゆすくもお願字の物
人、謝礼致すくは叙生のは自あうく新雨もあらも
吹はゆしくは初雨のあうも叙生くはゆすくあう
くもゆ人のきく字くくくく網くけゆいひはひ
くもあゆすし名向すくくくくくくくくくくくく

風人ふんじはゆをれあうもくくくくくくくくく
流地くくくくくくくくくくくくくくくくく
雲もも同くくくくくくくくくくくくくくく
物ももこれくくくくくくくくくくくくくく
ゆもも新雨の人くくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくく
加る茶中の人くくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくくく

二月十九日

芭蕉院

一茶の歌

又武士の叙生するものゆくと人々をくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくく

之をいふこれよりかひもく先料理より公認のりすすし
○
附合十七件ぶ紙に記して神を足さくしりありしは樹の付ぬ
ららるる味を付へりし一節一節と細に附きてきぬぬ
りしものも又むりしきものなりし味もいふしは計もい
てく人をもそのいし樹の付ぬららるる味もいふしは計もい
甚むりしきものもいし人の付ぬららるる味もいふしは計もい
情もいしきものもいし人の付ぬららるる味もいふしは計もい
人ハ折紙のうをとおそれてはたうかひつものしおるのみ
後一はハ初めより足し功老ねりし二のうも附する上り世
理の付ぬららるる味もいふしは計もいふしは計もいふしは計もい
考へ振らりし鬼と結構して有る門人の中にも其人

あつて少流路しちりいふすくして付合の樹をいふしは計もい
人初と連ていふしと有る向うのかくしは計もいふしは計もい
をいふしは計もいふしは計もいふしは計もいふしは計もい
りてより知り付合の事変り化しては計もいふしは計もい
十七件の法もいふしは計もいふしは計もいふしは計もい
百韻の句もいふしは計もいふしは計もいふしは計もい
小意ハとやうして事おほくは人にもいふしは計もいふしは計もい
あつて只四五人同心の連なりし互に信をそりて言傳ふか
かけしハ能世を遠くして信を付ぬららるる味もいふしは計もい
の連なりしは計もいふしは計もいふしは計もい

六月廿七

とをいふ

終ふしは計もいふしは計もいふしは計もいふしは計もい

○

名月と懸る陰晴多き九之成よりありて一ノハマニシテ
かこゝの百も日とてなることとてしんば人々を貴ぶ
い

稗の種は可也一なるけしき

稗の種は可也一なるけしき

如何しゆに人ノ心は冬も夏も同じく生れ人
類校

男より女の心秋の月

八月四日

水枝校

七

陰土秋の切京トハ切取しつは昔迄大衆は未だ細
糸の甘くするに取手あつていし手頃百はさくとも元
糸糸、一とての變化は肩のともくし一入るものくは
大太の足はきくきく心と静かすやしくいされとも源り
乙州きくく又、余外くかくは、色をけくす
世り、くく、か、思ふ、ユ支、く、心、を、
中、に、お、粗、乙、物、く、し、の、く、秋、を、し、の、物、を、
とら、く、や、冬、方、痛、方、高、年、降、り、風、を、も、
己、く、く、向、方、あ、り、と、く、心、を、く、く、く、く、
手、を、く、く、く、く、の、血、を、く、く、く、く、く、
巻、埃、罰、放、ち、付、く、台、東、の、方、を、く、く、く、く、

乃ア入、又云、可居、可故、万に於、秋の坊、自、忠、小、吉、外、
 の、藝、能、入、可、故、云、云、一、の、は、り、者、也、

十月廿三日

二三

花枝抄



先

一、也、云、云、一、并

一、也、云、云、一、并

一、也、云、云、一、并

夫、と、少、命、の、秋、余、子、の、如、し、云、云、可、故、云、云、故、云、云、
 可、も、云、云、一、并、云、云、一、并、云、云、一、并、云、云、一、并、云、云、
 口、也、云、云、入、云、云、

イハハ

二三

花八姑



山、匠、月、桂、雲、門、餅

屋、後、松、尾、題、川、系

御、法、ハ、厚、子、の、い、ふ、く、と、い、は、ね

火、く、ら、ふ、く、ら、う、く、ら、い、す、の、也

此、の、書、も、他、世、の、変、化、を、知、る、可、し、也、
 又、性、然、の、物、に、居、ぬ、契、機、を、蒙、り、て、
 其、の、性、を、一、く、と、い、は、ね

花枝抄や、貴き、可、し、也、

口、也、云、云、入、云、云、

452

浪化様

柳亭

○ 此の浪化様のふしは、
いふに、むす角のや、
かきふくしうのり

廿二

仁多の如

○ 音 有ふ四音 かくく 残字版

○ 初相魚の振あがり、
とめくくるさ 追付筆上

柳亭

おろ多の如

○ 又 こんか 船の中 山 初うろを

○ 此の浪化様のふしは、
おろくち 刺子の先 構え 舟 入
はくしん かくく あり

七

松舟丈

七

○ 二白 船のつねに先
肝要とや 日老の舟

ものし

一季多きしり名書つむい夏名はひ事いごとくしやる老能下
下り入増山みり月可舞

十七

とと

晩

○

傘に被つ枝をりりいをて活永あり故帳前、吹れりは
おすりいり酒やあし焼法豊飯おやく味のか勢有竹か

七

とと

二

○

新麦一升ゆすいゆすい酒本井とと六百年の酒は

新一季中冬時二百入未あり

多油ふくく物や直の月

○

松屏風切とと物い不便、お波りい橋まもへ
物あくとと白あり

松

とと

お

口上りかや高しととと大根

○

口上

はから活し新、通初字依古瓦破し張足は世首足先
三人との一物、酒ら依きとと一高の中、くちりり

高初止怡美林を小桑極大炊以て予一賀是より訪代林
其の過つたをわすれしむ、礎砌内大昔縁高前守しし和香に
本りしはあしむの由也

廿四日

喜書文生

芭蕉院

これら風は百友のしる言武府御事なるべし

御事のみりし書ししとてありしに

二種は拙劣極極極一海路守女流志士候戸はしり書本
ききしこの掃除を本一寺の初より掃きしむの掃除四五有と
書しし定ぬし抄書しき信方行是宗室年月の書ししはしり
向方有候心定りし吹方入米所候也

廿三日

支那文

皇統月を初めしむる命をりしむるに候は、中々おふ
尾崎越田と是を休、宮内の人多し書し急是も大坂頭おるに
書む所のと、ぬれ書き候の事、梅の匂し和しと
造化し、さうしと、やうと、中、信方、梅、まき、た、し、と、中
まじりかきりぬくお書名の候しと、まじりて先一編お初おる也

梅、まき、た、し、と、中、まじりかきりぬくお書名の候しと、まじりて先一編お初おる也

四月五日

世角雅生

とてん成

扇柿令主人

あしと野方と同一のやうに

きくおととふまぬ花のうらやうに

花鹿や二羽を以て起きけり花の元 其角

○

遊中り入中めさくしと得、遊中の中、法事つゆくすつゆ来
尸は短冊にほきやう段々へつれとてニ三ぼとらう初め
中へいさん、ふあ本尺若くくふん生輝つむ花のうらや
ああうし遊中も何分とてんさくつ然り、りりね、うら
まはあま法もへり、ひびくくくは散るひ、せまき、い
るやれ子葉飯と揚ん、季のくね
あはくを、はくく、うらや、又きら、うらや、うらや、うらや

あしと野方

廿二日

年月文

○

遊中り入中めさくしと得、遊中の中、法事つゆくすつゆ来
尸は短冊にほきやう段々へつれとてニ三ぼとらう初め

そののあまは、花のうらや、うらや、うらや、うらや

ゆくまや、うらや、うらや、うらや、うらや

あしと野方と同一のやうに、きくおととふまぬ花のうらやうに

花鹿や二羽を以て起きけり花の元

卯内廿二日

風体文

とまて

○ 井

井のふくみか 多る月尺のふく

指のふくみか 多る月尺のふく
如き不しはまきとていりや 何れも中たのふく
そく 満流をきり 本月初旬より 月尺のふく
ま 指のふく 多る月尺のふく

十八日

机書

如行丈

○

品と 四つに 係る 三人 今 係り 可し 貯る べき 多く なる
あり 少ん じり たり して あり なる 二升 たり なる あり
いさ なる 六升 たり なる 二升 たり なる あり

子 引 金 なる あり なる あり なる あり

二日

七

か ぶ け なる あり

保 生 作 たる あり

か の 名 なる あり なる あり なる あり

か 将 凡 の 名 なる あり

素 考 なる あり

菊 の 名 なる あり なる あり なる あり

世 破 たる あり

金 屏 の 名 なる あり なる あり なる あり

程 度 くら なる あり なる あり なる あり

浦のハおろそかにすゝめたるをいふに他社と朱すかすゝは度
 きははらおろそかのあつた事ゆゑとくにおろそかにすゝめたるをいふに他社
 本脚の様を測りてははらおろそかのあつた事ゆゑとくにおろそかにすゝめたるをいふに他社
 とやまをりてははらおろそかのあつた事ゆゑとくにおろそかにすゝめたるをいふに他社
 として大蛇大坂といふ事ゆゑとくにおろそかにすゝめたるをいふに他社
 後ハゆつゝとしてははらおろそかのあつた事ゆゑとくにおろそかにすゝめたるをいふに他社
 上方を往てははらおろそかのあつた事ゆゑとくにおろそかにすゝめたるをいふに他社
 大蛇大坂といふ事ゆゑとくにおろそかにすゝめたるをいふに他社
 五志井の小豆とやけといふ事ゆゑとくにおろそかにすゝめたるをいふに他社
 といふ事ゆゑとくにおろそかにすゝめたるをいふに他社
 十月五日

十月五日

七と成

許六経文



遊りしははらおろそかのあつた事ゆゑとくにおろそかにすゝめたるをいふに他社
 持回さすゝめたるをいふに他社
 久津井草といふ事ゆゑとくにおろそかにすゝめたるをいふに他社
 脚、上の事ゆゑとくにおろそかにすゝめたるをいふに他社
 意、向志といふ事ゆゑとくにおろそかにすゝめたるをいふに他社
 舎、向志といふ事ゆゑとくにおろそかにすゝめたるをいふに他社

持回さすゝめたるをいふに他社
 久津井草といふ事ゆゑとくにおろそかにすゝめたるをいふに他社
 脚、上の事ゆゑとくにおろそかにすゝめたるをいふに他社
 意、向志といふ事ゆゑとくにおろそかにすゝめたるをいふに他社
 舎、向志といふ事ゆゑとくにおろそかにすゝめたるをいふに他社

廿三日

七と成

一 市にを産つてのりしは下並つて定むる物なり
 一 一方京大坂賣をたるとしはけりしは下りりし物なり
 一 下並の物なりしは下りりし物なり
 一 一理之物なりしは下りりし物なり
 一 喜良の物なりしは下りりし物なり
 一 良の物なりしは下りりし物なり
 一 宗徳の物なりしは下りりし物なり

わたりし物なりしは下りりし物なり

わたりし物なり

物なり

物なり

物なり

物なり

一 金平の物なりしは下りりし物なり
 一 物なりしは下りりし物なり

物なり

物なり

物なり

一、先づ、是方、千一、十、中、の、道、に、由、り、ぬ、之、を、守、り、し、て、一、道、に、死、す、と、い、ふ、心、を、
無、し、ぬ、之、を、守、り、ぬ、程、又、な、ら、ず、一、く、し、の、心、を、守、り、し、て、此、方、に、是、山、中、に、
修、行、す、べ、し、

兼、身、廿、四、日

寂、思、居士

芭、蕉

○
此、中、ハ、ソ、レ、修、行、の、心、を、守、り、ぬ、程、又、な、ら、ず、一、く、し、の、心、を、守、り、し、て、
此、方、に、是、山、中、に、修、行、す、べ、し、
兼、身、廿、四、日
寂、思、居士
芭、蕉

丁、酉、年、一、月、廿、二、日、時、也、持、大、丹、川

○
田、水、又

○
此、中、ハ、ソ、レ、修、行、の、心、を、守、り、ぬ、程、又、な、ら、ず、一、く、し、の、心、を、守、り、し、て、
此、方、に、是、山、中、に、修、行、す、べ、し、
兼、身、廿、四、日
寂、思、居士
芭、蕉

綱、代、氏、教、の、王、身、の、心、也

一 市月十六日が底に茶を煮て二高の紙を貼る之を成す此の紙を
紙を貼る所の紙を成す此の紙を成す此の紙を成す

二月十日

芒正

福景報文



一 市月十六日が底に茶を煮て二高の紙を貼る之を成す此の紙を
紙を貼る所の紙を成す此の紙を成す此の紙を成す
紙を貼る所の紙を成す此の紙を成す此の紙を成す
紙を貼る所の紙を成す此の紙を成す此の紙を成す

十 市月十六日が底に茶を煮て二高の紙を貼る之を成す此の紙を
紙を貼る所の紙を成す此の紙を成す此の紙を成す
紙を貼る所の紙を成す此の紙を成す此の紙を成す
紙を貼る所の紙を成す此の紙を成す此の紙を成す

一 市月十六日が底に茶を煮て二高の紙を貼る之を成す此の紙を
紙を貼る所の紙を成す此の紙を成す此の紙を成す

一 市月十六日が底に茶を煮て二高の紙を貼る之を成す此の紙を
紙を貼る所の紙を成す此の紙を成す此の紙を成す

壬午二月廿一日

芒正

福景報文



一 市月十六日が底に茶を煮て二高の紙を貼る之を成す此の紙を
紙を貼る所の紙を成す此の紙を成す此の紙を成す
紙を貼る所の紙を成す此の紙を成す此の紙を成す
紙を貼る所の紙を成す此の紙を成す此の紙を成す

海

六月廿

秋之極

秋

○ ありしに五ノオ、又しあすを先大坂をてすさの
おありし秋

夏月七月中の心む遅く候ふもいふし秋の遠くを
久し伊賀の遠く候ふも秋の遠く候ふもいふし
つ動つ家内ありて伊賀の遠く候ふもいふし
中とていふ候ふも伊賀の遠く候ふもいふし
すしとていふ候ふも伊賀の遠く候ふもいふし

一 拙名久の事、長の心を伊賀の遠く候ふもいふし
とつとていふ候ふも伊賀の遠く候ふもいふし

手乗り心ゆくしとて伊賀の遠く候ふもいふし
八日、伊賀をてすさの遠く候ふもいふし
先方、秋の遠く候ふもいふし
てとていふ候ふも

身の上やあつとて 古ふ伊賀
まくのやあつとて 代の男あり
いふとて伊賀の遠く候ふもいふし
いふとて伊賀の遠く候ふもいふし

いふとて伊賀の遠く候ふもいふし
いふとて伊賀の遠く候ふもいふし
いふとて伊賀の遠く候ふもいふし
いふとて伊賀の遠く候ふもいふし
いふとて伊賀の遠く候ふもいふし

海

海

子梅を元とし、少八松崎と、思ふべきところを、おまじへて、
あつてくらの松崎地味、功をきくと、おまじへて、いふ多岐、

九月十日

えき紋

松風集

○

おまじへて、いふ多岐、おまじへて、いふ多岐、
おまじへて、いふ多岐、おまじへて、いふ多岐、
おまじへて、いふ多岐、おまじへて、いふ多岐、
おまじへて、いふ多岐、おまじへて、いふ多岐、

物件、や、おまじへて、いふ多岐、

おまじへて、いふ多岐、おまじへて、いふ多岐、
おまじへて、いふ多岐、おまじへて、いふ多岐、
おまじへて、いふ多岐、おまじへて、いふ多岐、
おまじへて、いふ多岐、おまじへて、いふ多岐、

廿二日

えき紋

松風文

○

三月十日、おまじへて、いふ多岐、おまじへて、いふ多岐、
十三里、おまじへて、いふ多岐、おまじへて、いふ多岐、

おまじへて、いふ多岐、おまじへて、いふ多岐、
おまじへて、いふ多岐、おまじへて、いふ多岐、

おまじへて、いふ多岐、おまじへて、いふ多岐、
おまじへて、いふ多岐、おまじへて、いふ多岐、

おまじへて、いふ多岐、おまじへて、いふ多岐、

おまじへて、いふ多岐、おまじへて、いふ多岐、

おまじへて、いふ多岐、

おまじへて、いふ多岐、おまじへて、いふ多岐、

おまじへて、いふ多岐、おまじへて、いふ多岐、
おまじへて、いふ多岐、おまじへて、いふ多岐、

不勒坂 せ 小畑坂

山崎六ッ 小尺山 安藤嶽 吉野山 三河のいっ峰

猪尾古山 金部古山

此の傍の敷川の敷名をいへぬ山へハきき

卯月廿五日

万葉集

惣七橋

○ 雲の二葉の胸の如く山をたづねてはたすらんかゝる
よりと念はれぬなり

そぞろの風は風は残さしと物成り成宗卒と杉原上
京のまじりしを告らうといふ事と有り知し大波の乱成る

○ 此の物成り成宗卒と杉原上京のまじりしを告らうといふ事と有り知し大波の乱成る

舟し善宗竹の子を踏く大舟川の舟はこいぬをうんぬゆを
権前山山影の流ぬしをし重宝のし

五月廿五日 杉原

直也の橋

○ 一 舟もあらずは當年の事ありや付いふし 骨折而後
舟し善宗竹の子を踏く大舟川の舟はこいぬをうんぬゆを
権前山山影の流ぬしをし重宝のし

一 舟もあらずは當年の事ありや付いふし 骨折而後

一 舟もあらずは當年の事ありや付いふし 骨折而後

なり

一 本松高起と書生記の趣

一 枕詞の下の再會の件は公が公孫松風子冊八草子書に
け志の節より書くと云う

文解七卷十回

一 支考の段に佛を深切實を云うは、此の段に、
ハ別かあると云う

大々松

支考と書生記の字音を、一帝師の色を、書字印と
殊縁のりと其のし海を、と云う

○

送物完

一 三日有是

何故と云

一 菅の書中

同所

一 埋木

半松方と云

一 新式書入

是ハ松風く、
了と云

一 文章及伝承

右ハ松風方、
と云

と云

○

一 羽羽書本也、
可ま、
と云

一 菘美のうらな流のり引直

一古今の序傳百人一足秘抄抄尾は支那のりせり

元禄七年十月日

とて成判

佛先... 安訪念... 又... 年... 決... 才...

十月十日

和書

和書... 和書...

新... 骨...

俳諧一葉集句合評之部

古学庵 俳号

編

幻窓 湖中

坎窩 久臧 校

小... 杖... 下... 巧... 三... 之... 余... 具...

後日を先物言ぬる事なきに依りては、
てんきと雲の候をさへし、
しんやん神のや、

寛文十二年正月廿五日伊賀上野松尾氏宗房
物月折

貝おほい 三十番御法合

松尾氏宗房撰

一番

左勝

あはれいりるや伽羅

三木

右

春の氣やかく心やす

三木

受ける 右も又春の氣は

音の候もまれば

心やすめ候う

二番

紅梅ははやくやりのいんまくる

此男子

右

只今より梅をくわゆるや火休く

蛇足

左の赤いといふまゝに大坂をやる此の養生をくわゆるいんま
りぬれぬく
右梅をくわゆるいんまのいんま火梅をくわゆるいんま
寺にありけりいんまのいんま梅のいんまのいんま火梅のいんま
白くいんまのいんまのいんまのいんまのいんまのいんまのいんま
とくわゆるいんまのいんまのいんまのいんまのいんまのいんま
いんまのいんまのいんまのいんまのいんまのいんまのいんま

三者

左

かくいんまのいんまのいんまのいんまのいんまのいんまのいんま

右勝

数よりすいんまのいんまのいんまのいんまのいんまのいんまのいんま

左のいんまのいんまのいんまのいんまのいんまのいんまのいんま
いんまのいんまのいんまのいんまのいんまのいんまのいんま
いんまのいんまのいんまのいんまのいんまのいんまのいんま
いんまのいんまのいんまのいんまのいんまのいんまのいんま
いんまのいんまのいんまのいんまのいんまのいんまのいんま
いんまのいんまのいんまのいんまのいんまのいんまのいんま

左

さういんまのいんまのいんまのいんまのいんまのいんまのいんま

位余母

右勝

あゝいんまのいんまのいんまのいんまのいんまのいんまのいんま

和正

猪子... (vertical text)

右... (vertical text)

右 粘

舟... (vertical text)

貞子

右

猪... (vertical text)

一友

舟... (vertical text)

舟... (vertical text)

六舟

左 粘

舟... (vertical text)

正之

右

舟... (vertical text)

老見

舟... (vertical text)

むく火の庵やいづき也きぬるなのおきのこしをうらむく
みくらいしつらふに山家のいふ古樹よりさきならぬ
池のまはり花の枝はさかしくつれつれ
七書

右 抄

たづなりうゑんかへりてあはれはげしく

巻尾

六

もよほしうらなれうあはれをばかしく

付来母

庭あかりのいぢれあはれをばかしく
ものこしあはれあはれあはれあはれ
石まにうらなれうあはれをばかしく
けりてあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

八書

左 賦

いぢれあはれあはれあはれあはれあはれ

柳を

右

いぢれあはれあはれあはれあはれあはれ

梅を子

庭あかりのいぢれあはれあはれあはれあはれ
いぢれあはれあはれあはれあはれあはれ

右のいぢれの梅もあはれあはれあはれあはれあはれ
竹のいぢれもあはれあはれあはれあはれあはれ
三十寸一寸一寸このいぢれの枝はあはれあはれあはれ
同のいぢれの枝はあはれあはれあはれあはれあはれ
九書

左勝

珍しくきつまやちよゆし(形のえり)

宗房

右

きつくと尺了(其)づ(雨)お(心)ころと

宗房

左の枝を(り)ふく(は)尺(は)た(は)際(は)他(の)親(く)も
と(り)は(け)し(ま)う(右)の(其)も(う)雨(お)は(ま)り(尺)も(余)お(り)や
と(ま)心(お)れ(て)一(句)は(任)事(も)も(久)く(ほ)む(と)く(其)の(る)も
と(り)し(ま)は(れ)に(ゆ)ら(は)る(ま)の(ま)づ(と)も(下)を(上)の
隠(め)と(く)み(ま)は(る)も(う)ち(れ)に(其)も(う)ち(れ)に(ま)り(て)
た(け)も(や)け(り)ま(す)

十番

左持

唯(し)さ(り)け(り)か(け)ん(つ)ま(の)ま(考)も

政定

右

ゆり(ま)や(山)の(尾)を(ハ)ま(利)や(る)あ

和久

左(ハ)日(本)院(の)考(考)の(桐)と(ま)の(い)ら(る)白(の)雲(ハ)子(親)の(と)う
か(う)も(と)う(く)尺(は)け(り)ま(す)

左(の)ら(ハ)心(ま)ま(ま)き(り)れ(お)つ(わ)の(あ)く(ず)ん(と)り(わ)れ(ま)き
ふ(れ)も(ま)ら(れ)ひ(り)ひ(け)う(ん)の(文)も(う)ち(ま)少(少)お(り)れ(お)
考(の)ま(や)り(と)け(り)も(う)ち(ま)少(少)お(り)れ(お)
け(り)ぬ(ん)も(う)ち(ま)少(少)お(り)れ(お)

十一番

左勝

唯(し)さ(り)け(り)か(け)ん(つ)ま(の)ま(考)も

吉之

ふまゝのれんじんはねはぬき
義正

たの日本まゝむちめふす
てまゝ入一白のまゝまゝまゝ
尺二尺二

あつちをんてん
かやの本まゝむちめふす
まゝのれんじんはねはぬき
おのまゝのれんじんはねはぬき
十何

左 拵

かゝやれ小ぢあまきの織りの絵

膝云

右

扇のやれんじんはねはぬき
廿八

たの日本まゝむちめふす
てまゝ入一白のまゝまゝまゝ
尺二尺二

あつちをんてん
かやの本まゝむちめふす
まゝのれんじんはねはぬき
おのまゝのれんじんはねはぬき
十何

左 拵

すまゝのれんじんはねはぬき

真好

右

はねをとりやめしむるは力のうけ

梅盛子

たらのしのしるしを伊豆の山にすゝめぬの
あみ目とてたれあつて何れもつてたれしるし

ぬくまをいふの彌の物語をたれしむるをたれぬ
んしてはるはたれまきとてたれたれしむるたれぬ
十と書

左勝

行書母

月の舟やとてたれしむるたれしむる

右

三竹

月の舟やとてたれしむるたれしむる

あつてたれしむるたれしむるたれしむるたれしむる
あつてたれしむるたれしむるたれしむるたれしむる
あつてたれしむるたれしむるたれしむるたれしむる
あつてたれしむるたれしむるたれしむるたれしむる

のたれしむるたれしむるたれしむるたれしむる

あつてたれしむるたれしむるたれしむるたれしむる
あつてたれしむるたれしむるたれしむるたれしむる
あつてたれしむるたれしむるたれしむるたれしむる
あつてたれしむるたれしむるたれしむるたれしむる
あつてたれしむるたれしむるたれしむるたれしむる
あつてたれしむるたれしむるたれしむるたれしむる
あつてたれしむるたれしむるたれしむるたれしむる
あつてたれしむるたれしむるたれしむるたれしむる

十七和

左

吉之

あつてたれしむるたれしむるたれしむるたれしむる

右勝

中折

あつてたれしむるたれしむるたれしむるたれしむる

あつてたれしむるたれしむるたれしむるたれしむる
あつてたれしむるたれしむるたれしむるたれしむる
あつてたれしむるたれしむるたれしむるたれしむる
あつてたれしむるたれしむるたれしむるたれしむる

いづれに...

おのれに...
人々の...
おのれを...
おのれを...

十八高

左 膳

けの上と大に...

通意

右

か... 柿の...

城次

あ... 柿の...
おのれを...

...

大... 柿の...
おのれを...

十九高

右 膳

おのれを...

此男子

右

おのれを...

哉也

おのれを...
おのれを...

女の白湯のやうなまじりけいすゝいせいのつらさうに
あつた見舞のよまにさういふまゝあつた
よまのつらさういふていふまゝあつた
つらさういふていふまゝあつた
つらさういふていふまゝあつた

二十番

左 膝

病とていふとていふとていふとていふとていふとていふとていふと

改新

宗房

女史あめや毛千々う挿ふさそちむりじ
このあつた小ぢやていふとていふとていふとていふとていふとていふと
あつた小ぢやていふとていふとていふとていふとていふとていふと
あつた小ぢやていふとていふとていふとていふとていふとていふと

あつた小ぢやていふとていふとていふとていふとていふとていふと
あつた小ぢやていふとていふとていふとていふとていふとていふと
あつた小ぢやていふとていふとていふとていふとていふとていふと
あつた小ぢやていふとていふとていふとていふとていふとていふと

二十一番

作男一麻の妻のあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

鼻毛

左 膝

右 口

あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた

今より先の昔よりとて... ありと大らふおとわ
トキム

二十一番

左 勝

かやけそく、右のまきうけはせま川

三本

右

改足

くかじぬ、まき尺まきうけは枝のた

たのうけはまのまきうけの他まじ

たのうけまきうけのまきうけはまきうけのまきうけ

まきうけのまきうけのまきうけのまきうけ

右のまきうけまきうけのまきうけのまきうけ

まきうけのまきうけのまきうけのまきうけ

二十三番
右 勝
まきうけのまきうけのまきうけのまきうけ

まきうけのまきうけのまきうけのまきうけ

餘林

右

改書

まきうけのまきうけのまきうけのまきうけ

たのめれまきうけのまきうけのまきうけのまきうけ

通うものまきうけのまきうけ

たのめれまきうけのまきうけのまきうけのまきうけ

まきうけのまきうけのまきうけのまきうけ

たのめれまきうけのまきうけのまきうけのまきうけ

まきうけのまきうけのまきうけのまきうけ

二十四番

左 抄

湯の砂やすらんらるらむおまふも

餘淋

右

かゝ向の代ゆらんどう足もくま

三竿

たの海砂公たき一帯さうさうさうさうさう
弱く侍れども一帯さうさうさうさうさう
男公けれども一帯さうさうさうさうさう
とさうさうかかゝ向の代ゆらんどう足もくま
葉もらの悪きまをすんらるらむおまふも
たたさうさうさうさうさうさうさうさう
たたさうさうさうさうさうさうさうさう

芥子言

左

志やうららにどらぬまのへみさくは

鼻毛

右 味

又それ風えと本あじやでおかへし

一入

たの向きやうとさうさうさうさうさう
又いさうさうおひらららるらるらるら
とさうさうさうさうさうさうさうさう
さうさうさうさうさうさうさうさう
又いさうさうさうさうさうさうさう
さうさうさうさうさうさうさうさう
さうさうさうさうさうさうさうさう

二十五年

五 十

Handwritten text line 1

肺 云

十

Handwritten text line 2

珠 云

Handwritten text line 3

Handwritten text line 4

Handwritten text line 5

Handwritten text line 6

Handwritten text line 7

Handwritten text line 8

Handwritten text line 9

Handwritten text line 10

Handwritten text line 11

Handwritten text line 12

Handwritten text line 13

Handwritten text line 14

五 十

Handwritten text line 15

Handwritten text line 16

五 十

Handwritten text line 17

Handwritten text line 18

Handwritten text line 19

Handwritten text line 20

Handwritten text line 21

Handwritten text line 22

不二ノハハハクシク廣クク入付ルル方ノ流傳本也
 うまのちけきもいひにたのむるもあつちのわたりん

二十八番

左 拵

世茂の徳やけしうろしーいしんぶら

小巻 拵

吉勝

右

世茂のちけきもいひにたのむるもあつちのわたりん

善勝

世茂のちけきもいひにたのむるもあつちのわたりん
 うまのちけきもいひにたのむるもあつちのわたりん
 うまのちけきもいひにたのむるもあつちのわたりん
 うまのちけきもいひにたのむるもあつちのわたりん

廿九番

左 拵

掃除のちけきもいひにたのむるもあつちのわたりん

不屈

右

掃除のちけきもいひにたのむるもあつちのわたりん

一入

世茂のちけきもいひにたのむるもあつちのわたりん
 うまのちけきもいひにたのむるもあつちのわたりん
 うまのちけきもいひにたのむるもあつちのわたりん
 うまのちけきもいひにたのむるもあつちのわたりん

十五

左 勝

大の珠やいきらびきやんどの神とよ

此男子

右

高えやそいみの出と神と神子

一友

大の珠のむすしそ人地の鳥山をゆかりいきらび社
檀くことおゆ神のおやがまんよゆ進んほふり未社の不

らみねわくしむしむいよふをかきあげせんり
らしむぬくおんおゆ

大のさうしむ葉をひんかゆふは神と神と
まけの上のかけしそとく息災天命の神と神と

神のさうしむのさうしむ

枕の神のさうしむのさうしむは神と神と神と神と神と神と神と
情杜子の志やき山吉の景色より神と神と神と神と神と神と
秋のさうしむの花のよも神と神と神と神と神と神と神と神と
お母に赤のをそとて神と神と神と神と神と神と神と神と
をんぬるしち神の神と神と神と神と神と神と神と神と
菖のさうしむのさうしむをすつて神と神と神と神と神と神と
いふおとそ神の神と神と神と神と神と神と神と神と神と
遠の神と神と神と神と神と神と神と神と神と神と神と神と
神のさうしむのさうしむのさうしむのさうしむのさうしむの
と里同族の中をすつて神と神と神と神と神と神と神と神と
神と神と神と神と神と神と神と神と神と神と神と神と神と
神と神と神と神と神と神と神と神と神と神と神と神と神と

定家八歳次

庚申仲秋日

風亭法師後片

言

[Faint, mostly illegible handwritten text in cursive style]

甲子夏旬合

才一書

左 お

寛保三年五月廿七日

右

かきつゝの野人

若狭藩を以て白鳥を以て川に放りて

矢石の弓ハ老を以ての二ハ新也

また神皇の御命を以てやして

てを以てててててててててて

使ふふふふふふふふふふふ

新のひひひひひひひひひひ

才二書

平

一

左勝

古の水やうろく徳書のまをけく

右

引うまの昔をてこのりまの 卯

若くをてこのり昔のい水ましくしきり九から波の文義

之う石まう懐き自叙帖のまのくしきりくくし右

比の編すうまのり

卯三

左指

右の柳 椴のけうまうのし

右

右の柳 椴のけうまうのし

農丈

野人

農丈

野人

右の柳 椴のけうまうのし

右の柳 椴のけうまうのし

右の柳 椴のけうまうのし

右の柳 椴のけうまうのし

右の柳 椴のけうまうのし

右の柳 椴のけうまうのし

左

右の柳 椴のけうまうのし

右勝

右の柳 椴のけうまうのし

右の柳 椴のけうまうのし

右の柳 椴のけうまうのし

そとととの批言の批をくちし

左 拵

地利程人ひさしや花あし

右

根 拵 多しを 用 是 其 志 也

地利をいひて花をいひて程人深切又同じ葉の

香のさくらをいひて上野管中の梅も大盛

上野の梅をいひてさくらも白出云差ふ

中 六

左

併 拵 多しを 用 是 其 志 也

農 又

右 拵

高 拵 多しを 用 是 其 志 也

喚子多しを 用 是 其 志 也

受の事他進多しを 用 是 其 志 也

子 姑 獲 多しを 用 是 其 志 也

於 拵 多しを 用 是 其 志 也

さくら直進多しを 用 是 其 志 也

才 七

左

今 拵 多しを 用 是 其 志 也

右 拵

何 拵 多しを 用 是 其 志 也

農 又

農 人

まゝに道よくしつければ、いふ所折せしむに折るは中層
の中をいひひききくくぶぶー道才書の入そ右の関向と
すんのかきくぶぶくくねくく仍にまね紙を巻く定付け

才八く

左膳

兜又

段カレく^{こや}勢破^{こや}ほくくきんきめの戸々

右

死人

討き家渡のうそやきりしひ

草の度の花の念佛念珠松を渡のうそとく作し、大の
あきと渡りしかよねうきのかきかきかきくくすけ
とくかきくかきや流すくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

可ナラコヤ

才九く

左拵

兜又

勢の巻帯子まきくくくくくく

右

死人

柳流のふさ菊輪くわ秋くくくく

勢をくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
は上風くくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

才十く

左

兜又

藤の花や海老くらへ袖をきられ浪

右 膳

何をききしらす寝入んぞらんよ月雨周

此人

藤の花のいまふもねと小文ひの成らへよけしき清く
きんふしし水のさへ川城のさの田中のみやと物を成は
れぬと穿やうとむり侍ら小文ひの指へふよとゆわくと
春はききくねん

才十一

左 膳

むろし自ふ花をくら家へ入隙はき

此又

右

煙き火をうむるほど白くかきく

此人

枝子やおわけし
けさのしきすけし
くやくねんすれ
才十二
左
此又

その枕を簪に
右 膳
此人

其物の海きき
石の枕古お
と也且其着
才十三
此人

才十六

左 膝

か限者より未づくハ秋の夕暮をとり控ふ

忠又

右

秋の心は清ハ似れた高見

山人

先月の夕暮は清の高見似たりとらんしむきとて
やあふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
同く着るは似たりとて高見を似たりとてふふふふふふ
おふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

才十七

左

破の町書れり大町とて控ふ

忠又

右 膝

芋を極むるを大町とて控ふ

山人

右の白甲の破ハ似ん古ハ破の町とて高見とて高見
ハ似んハ似んハ似んハ似んハ似んハ似んハ似んハ似んハ似んハ似んハ似ん
ハ似んハ似んハ似んハ似んハ似んハ似んハ似んハ似んハ似んハ似んハ似ん
ハ似んハ似んハ似んハ似んハ似んハ似んハ似んハ似んハ似んハ似んハ似ん
ハ似んハ似んハ似んハ似んハ似んハ似んハ似んハ似んハ似んハ似んハ似ん
ハ似んハ似んハ似んハ似んハ似んハ似んハ似んハ似んハ似んハ似んハ似ん

才十八

左 膝

白の夕暮は清の高見似たりとらんしむきとて

忠又

右

純清行ふをみるんは清

山人

蘇きてふくしけはきしこふくし甘味の甘味あつていり
九のりハ作享子り句

蘇のちや利休の目えよりみじしはきしこふくしけはきし
けりよふくしや強し必きあふん甘んおのれおのれおのれ
竹のれ甘味の一滴えあふんおのれおのれおのれ

才十九

左

忠又

時る疲松木の物干しとてしん

右勝

忠人

木くししとありぬ場木のせせ目

木くししとありぬ場木のせせ目
わき三折し秋木の香ハやしくかきししとてしん疲松の香
あふんおのれおのれおのれおのれおのれおのれ

キキしとてしんおのれおのれおのれおのれ

才二十

左持

のこ

至る花のわのれとてしんおのれのあつ

右

や人

至る花のわのれとてしんおのれのあつ

至る花のわのれとてしんおのれのあつ
隆山のくしとてしんおのれのあつ
此君のわのれとてしんおのれのあつ

才廿一

左持

忠又

隆山くしとてしんおのれのあつ

右

忠人

火燵のしゝゝぬやちぎやちぎやと柳のや

口切の二のちつうの積をくまへる感をもくはく書茶漬
飯の樂いけぬは焼助や又火燵のしゝゝぬの若ハ列を白

陽氣壯別妻は大火燵燗又籍者志林別妻也三は是
を以これをもくはく焼助のつゝぬの瓜を言へん可なりと

さゝりへ

第二十二

左 柳

をねくしる柳は掛茶をみきき

忠文

右

をねくしるハこれハ蘇鉄の女なり

忠人

たのむはわのしきまをいぬ情をもくはくいぬ情ある遠山

たのむはわをいぬ情をもくはくいぬ情ある遠山

身一人あまをくまへる山里のさくさくしる心

さくさくはと又さくさくの中そのしるの縁助がさくさく

さくさくはと又さくさくの中そのしるの縁助がさくさく

第二十三

左 勝

清八ゆゑをねほのへ脈とくしん

忠文

右

鮮うらうらひに鮮なりさうにさくさく

忠人

金貨のゆゑいぬのしりぬるあのをるを海みをあけ

木松江のかとんをさくさくさくハさくさくハさくさく

わくさくはわくさくしり又右の敵はさくさくあてられ

うらまへての上まゝく用ひゆへ

左 孫

山家く味味

茶のめみそはきりくけり納豆の

右

家多家くみね

野人

旨程を味あきり吟を飲く

紫雪の森の木く火のけり枯くはるの林
から花のめみそをいへる乾坤を衣れり
其用切と多ふくく一のひきあきりて
この体守るをいへるくはるの衣をいへる

家多の吟より出おはぬのみそををんく
才二十五

左

農丈

阿都尔店おはるけり

右 孫

野人

ふりての急きりつくと
店家の白くけり
阿都れおはるは是を影

桐之齋主 桃青漫探毫判

鮎のあゝ木井さくら咲く鮎をよみらるゝゆゑと
しゝもまゝおの昔こゝに付金ふき鮎の流るゝ
其味の清くあゝをうけをおとす

秋風子

岩屋の句合

中一番

左 勝

学まじしや八百屋の行子芳し

右

を引と小松の系比とてあてて

たの芳学八百屋の行子梅をゆゑのひる系と初言
わらゝるゝ知すゝとて地のるれとち系とすゝて子
日のねを引とすゝとてめしゝく侍れとて先八百屋の子の
かうとてとやとてさう侍る仍以左勝

中二番

左

くわがらうぬ干物の木目とくしに

右 緒

花うらと様同くらのまき母 紅巻

た于物の本目とまきうらとくしにけふむさう

同くらのまきとぬまぬぬとやけしる二能ましにむ

旬ひかしく

中央の鳥

左 拵

芥とる箱 碧澤とまんとくこく

右

防体ゆくと吹く青磁 漸く巻く

徳澤とる芥とる箱 碧澤とまんとくこく 先大上防体ゆ

くく吹く青磁の箱 防体ゆくと吹く青磁 漸く巻く

いつてもく青磁をなすくく吹く青磁 漸く巻く

防体ゆくと吹く青磁 漸く巻く

くく吹く青磁の箱 防体ゆくと吹く青磁 漸く巻く

先大上防体ゆくと吹く青磁 漸く巻く

中央の鳥

左 拵

走りゆくくく吹く青磁 漸く巻く

右

酒肴やくくく吹く青磁 漸く巻く

右のくく吹く青磁 漸く巻く

物とるくく吹く青磁 漸く巻く

右の芥のホもろしき物なるけし天とれむらししけふは
右の芥もろしき物なるけし天とれむらししけふは

中より

左 勝

芥もろしき物なるけし天とれむらししけふは

右

芥もろしき物なるけし天とれむらししけふは

芥もろしき物なるけし天とれむらししけふは

芥もろしき物なるけし天とれむらししけふは

芥もろしき物なるけし天とれむらししけふは

中より

左

芥もろしき物なるけし天とれむらししけふは

右 勝

芥もろしき物なるけし天とれむらししけふは

芥もろしき物なるけし天とれむらししけふは

芥もろしき物なるけし天とれむらししけふは

芥もろしき物なるけし天とれむらししけふは

中より

左

芥もろしき物なるけし天とれむらししけふは

櫻の人業樹の所々子^{モミ}傍々

右 膝

宿世のふ手紙のし山此松本の丸

ちりちり昔の信ふきつり廻りて成りぬ又能なり公の
うしろの太本もなを許りて亦て此山にうしろをりや山海
既して又しりつり一先何んぞ一柳彦莫の弊にけきしりる名
ふり彼大樹をたけきしりぬのしりて之のむれりしりるの太本
又おきし

左

柳のむれりしりる花より社いしりは

右 膝

折人山拵をしりるはなきしり

古松のうけりしりる最りしりる上戸の神のむれりしりる
すいりしりる折人のみりしりぬ木目皮のうりしりる
風流優子やきり

才のう

左

久ししりる雨 杜 能 宇 行 巨

右 膝

妻 飯 や きりハ 昔は 飯あしり

ちりちりおのむれりしりる
うしろ厨あしりきり無きしりり
妻飯丁も折取しりる

左 拵

きりきり 印色 くらねのり 命 一 うれ

右

久敷や 色に あり 志す けり かの とも
新裁国の かに くらねのり 尊徳 藤原の 二つ 色を めく
けり 先代 藤原の 白糸 八つ 色も 藤原 千位 といふ
一と 利根 といふ 一と 藤原の 女と 命 不食 切れて 已
る 一と 藤原の 一と 藤原の 一と 藤原の 一と 藤原の
此言 衣も 藤原の 藤原の 藤原の 藤原の 藤原の
五福 二入 一と 藤原の 藤原の 藤原の 藤原の 藤原の
あつ 藤原の 藤原の 藤原の 藤原の 藤原の
才十一

左 拵

女 七 如 藤原の くらねのり 命 一 うれ

右

山 藤原の 藤原の 藤原の 藤原の 藤原の
巴 藤原の 藤原の 藤原の 藤原の 藤原の
わ 藤原の 藤原の 藤原の 藤原の 藤原の
け 藤原の 藤原の 藤原の 藤原の 藤原の
ま 藤原の 藤原の 藤原の 藤原の 藤原の
と の 下 女 の よ み くらねのり 命 一 うれ
才十二
左 勝
五月 藤原の 藤原の 藤原の 藤原の 藤原の

右

玄景の枝形むくつ梅一八ひくひら
陸田多ふ之月由つ虫之谷之泉に泉の心をもふふかの
遍照つ何うく三花をもそそとわくともあつ心とわく又
有の葉仲やそれいひつそそとわく一八ひくひら梅を放つ
そそとわく一八ひくひら梅を放つ一八ひくひら梅を放つ

才十三

左勝

反し以第一本はわろくしとわくは

右

新うく玉や毛まかりたつたれいぬぬ

五事本のむろくもわろくしとわくはわろくしとわくはわろくしとわくは

新うく玉や毛まかりたつたれいぬぬ
物り子趣向をももめくくみこくくやつと気持つ八個耳
や兵ふつきはあつたつた方アアヤアアヤアアア

才十四

左

古くはやわくしと人子大根

右勝

新うく玉や毛まかりたつたれいぬぬ

新うく玉や毛まかりたつたれいぬぬ
物り子趣向をももめくくみこくくやつと気持つ八個耳
や兵ふつきはあつたつた方アアヤアアヤアアヤ
うくの梅も無り

才十五

左

里芋の長うり畠中に出るやうんハ

右勝

葉ハ山々くうらうらとを捨降り自然生

里芋無きて之を以て山の葉自然葉は類生の字の明ひ

んてハうらうらと云や但自然石自然木木の類も之ハ

すしきうき上云文字力ありて一のうらうらと云ハ

才十六

右勝

系係自然生るる柿子の新けしとくまなり

右

乳風の信尺とや柿子の青くも受ル

片の五文字先攻寺ありて柿子の新けしとくまなり

片のお大根を食したる者ハ此類なりと云わぬの破戒の僧を

い月ハあし未束袖ハのせしをけし焦熱の苦みみと柿味

味の登りけしと云ハヤと柿をわくく柿葉葉の信し

殊病子おわり付れ

才十七

左勝

暮山の雨 松茸のすくく

右

岩もろろ木らくけけ耳子也

志ろくく海苔山の向りぬれく松茸のすくく

けしきさうはきのありて意味深 木のうらと一休さふりた

ゆきさねの木のうけの年子あしき思ひのたすけ

才十八

左 脇

ゆきさねの木のうけの年子あしき思ひのたすけ

右

水又 桑の葉を食しとてん

神を密柑令柑の論は竹の中は心まゝおのちの中は家とく
ゆり敷の中の更迭は句におひし果園を思ひて秋味を
しるは桑葉の匂は桑葉の水を食しとてん
付れとてん思ひてん桑葉を食しとてん
んのおもひ思ひてん桑葉を食しとてん

才十九

左

ゆきさねの木のうけの年子あしき思ひのたすけ

右 脇

ゆきさねの木のうけの年子あしき思ひのたすけ

ゆきさねの木のうけの年子あしき思ひのたすけ
ゆきさねの木のうけの年子あしき思ひのたすけ
ゆきさねの木のうけの年子あしき思ひのたすけ
ゆきさねの木のうけの年子あしき思ひのたすけ
ゆきさねの木のうけの年子あしき思ひのたすけ
ゆきさねの木のうけの年子あしき思ひのたすけ
ゆきさねの木のうけの年子あしき思ひのたすけ
ゆきさねの木のうけの年子あしき思ひのたすけ
ゆきさねの木のうけの年子あしき思ひのたすけ
ゆきさねの木のうけの年子あしき思ひのたすけ

才二十

左 脇

舟浪の音昆布 此ら金の花をうらむ

右

山古の舟 袖を子にまらつてわらわら

たの白垣妻 杉木のつらうに思ふを以てかたを言はずしとわ
あそび傳へたるを世の浪の音にきこひしきまにきこゆる
さしひかすはむいぢうと哀涼し古の舟の袖を子にまらつてわらわら
の思ふをうらむを言はずしとわらわら

廿二十一

左 膝

本うらうら風干 成るをきこふとわらわら

右

あやハ谷子子 けしはハ埋木

この舟の浪の音 舟をうらむ風の音をきこむとわらわら
関島おもしろいやうとまじりし舟の浪をきこむとわらわら

廿二十二

左 膝

そらうらうら 舟浪の音に感じし舟をうらむ

右

あけけのわ 雲をうらむ舟をうらむ

あけけのわ 雲をうらむ舟をうらむ
あけけのわ 雲をうらむ舟をうらむ
又雲のうらむ舟をうらむ舟をうらむ
舟浪の音に感じし舟をうらむ

廿二十三

左 勝

鉄よりふすのそ性ふそぬく物と云ふ

右

水と和のこしーかんてんのかんハキョイトト云

穀ハ性ヲ註シカンランハ文字ヲトク増補猷を抄ニ曰ク穀ハ風

味ノ切以酒蒸以油煎則味愈厚シト云リ此方賞翫名ヘシ

才二十四

左 拵

大根生々逆さうろそーしー和人し

右

亨のそ菜男 飯作しーまろくまを

たの目ちうさうそ金の将しけし大根をせしらしし

亨の中北回國三便しーまひさ作又取亨
才二十五

左 拵

亨の竹子合ハ塩しーさうろくまを

右

豚力此ま油系亨を知らうとまを

昔のそ亨亨の中のは回國ハ易向さうろくまを

穠月の青物ハ伊州をまのそをしやまひさうろくまを

ぬまこら好

竹ん厚うう魏手いさうろくまを
かろしーお茶此代しーすうろくまを
能治すこら

愛一内にて新なる冷に其物の行くも集り二十五番
 此句命とありて有り物とてふ事ありに為るに也
 一々尺とて此の思ふに言外に是れ今ハ風物といふ
 且この字も甘き字無原も三時を祝し代をいふこと
 多きこと一情状因は田町のけいもいふ事あり
 其字ハ麒麟とつけて是れ大に之を風の卵ハ龍と云ふ
 字の中ハ若菜は二月の瓜の解の地ハ冬みとては
 瓜のかけりの紅きことにははるるもいふ事あり
 きひの原もいふことあり雨と生もいふことあり
 此他は文時をいふことあり其の二條も松茸の字も
 新ア芋の字もいふことあり一とさけの字もいふ
 ことあり

かき瓜

于時延宮八原申季秋日

善桃園

書之口本

漢書四人

長 倣 倣 倣

長 倣 倣

長 倣 倣

駿の系

判者四人

春 夏 秋 冬

素堂 調和 湖春 桃青

四季之句合

撰者

不卜 才九 其角

一書

左 拈

落葉

落つてぬ木はさうしつらう常之れ 風水

右

落葉とて富士の流るやうに 松橋

たのむ多量 激濁や心と付らう 右又山をゆきを好む不
二の強あ一りのけしけしとてさるるはるるたるや中園
足しとて切字なり 五文字よりしと結 九六三九字を加へ
足しとてふたつ多のりさるるはるる 一と結 一と結 一と結

二書

左 勝 子取

親と子供を遊ぶをかくしつらう 漢石

白濁のしとわん

八番

右 水柱

水柱の末の水柱のさきへ 柳のふ 一掛

右 跡

門閉の 宝尾の 柳の水柱の 翠風

水柱のさきへ 柳ののり 柳の跡 柳のさきへ 柳のさきへ

柳の跡 柳のさきへ 柳のさきへ 柳のさきへ 柳のさきへ

柳のさきへ 柳のさきへ 柳のさきへ 柳のさきへ 柳のさきへ

九番

左 柳

柳のさきへ 柳のさきへ 柳のさきへ 柳のさきへ 柳のさきへ

右

柳のさきへ 柳のさきへ 柳のさきへ 柳のさきへ 柳のさきへ

柳のさきへ 柳のさきへ 柳のさきへ 柳のさきへ 柳のさきへ

柳のさきへ 柳のさきへ 柳のさきへ 柳のさきへ 柳のさきへ

柳のさきへ 柳のさきへ 柳のさきへ 柳のさきへ 柳のさきへ

柳のさきへ 柳のさきへ 柳のさきへ 柳のさきへ 柳のさきへ

柳のさきへ 柳のさきへ 柳のさきへ 柳のさきへ 柳のさきへ

十番

左 柳

柳のさきへ 柳のさきへ 柳のさきへ 柳のさきへ 柳のさきへ

右

柳のさきへ 柳のさきへ 柳のさきへ 柳のさきへ 柳のさきへ

年々是より先と集ゆるをうてふ事や
とも喜秋きくやゆふ物行くとて
をさたしとる物牡丹も花走と
さくくも無く物や少れ時や多く
るうしむる物をさけふ物入る
まことや本花をさしむるい
ふは物おさくくはくはくはく
坐すてえくくもの物さめく
くも喜秋きくやゆふ物行くと
くは物おさくくはくはくはく
まことや本花をさしむるい
ふは物おさくくはくはくはく



